

# 放浪詩

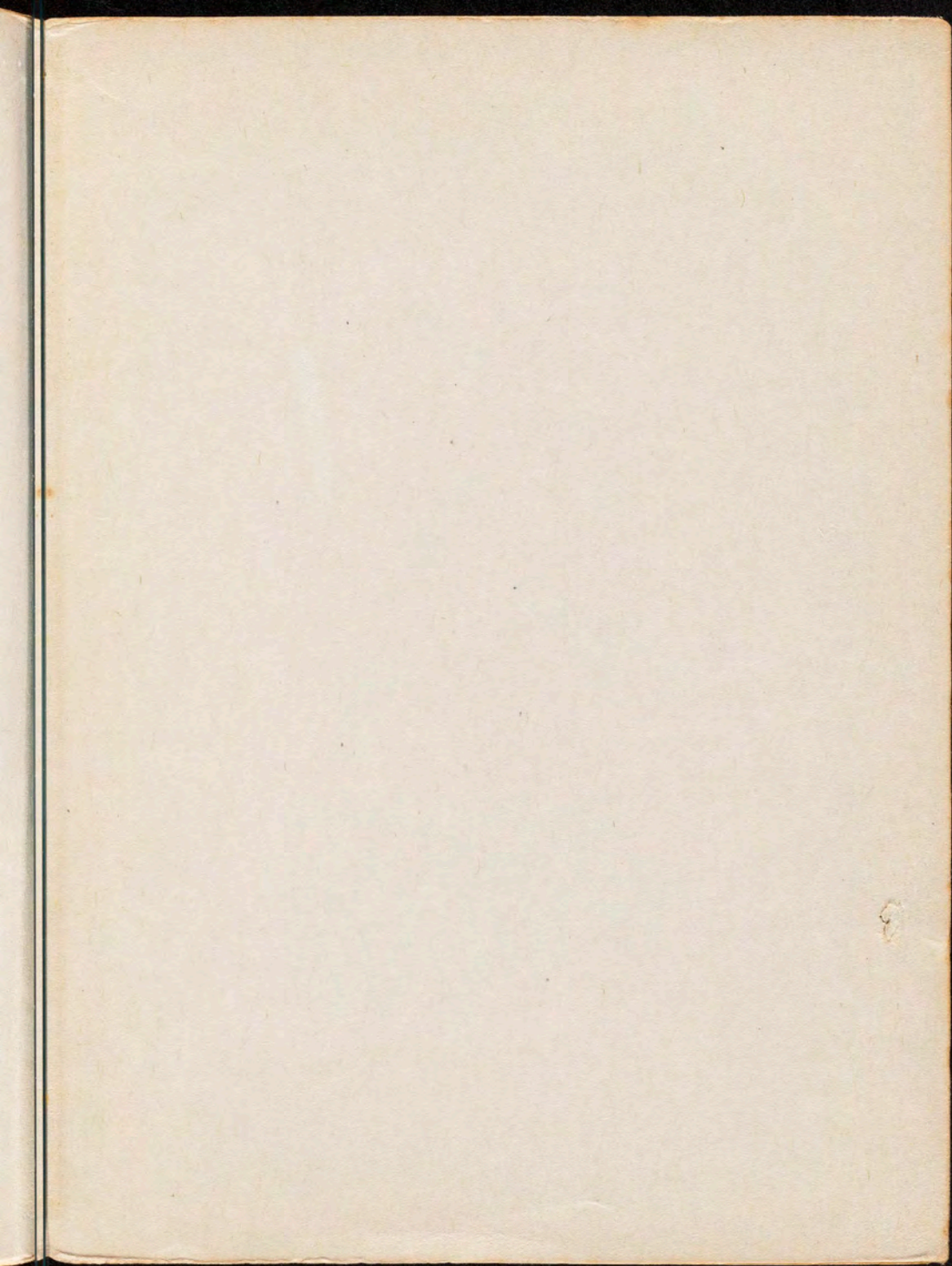
放浪詩社同人



米 國

放浪詩社版

放浪詩





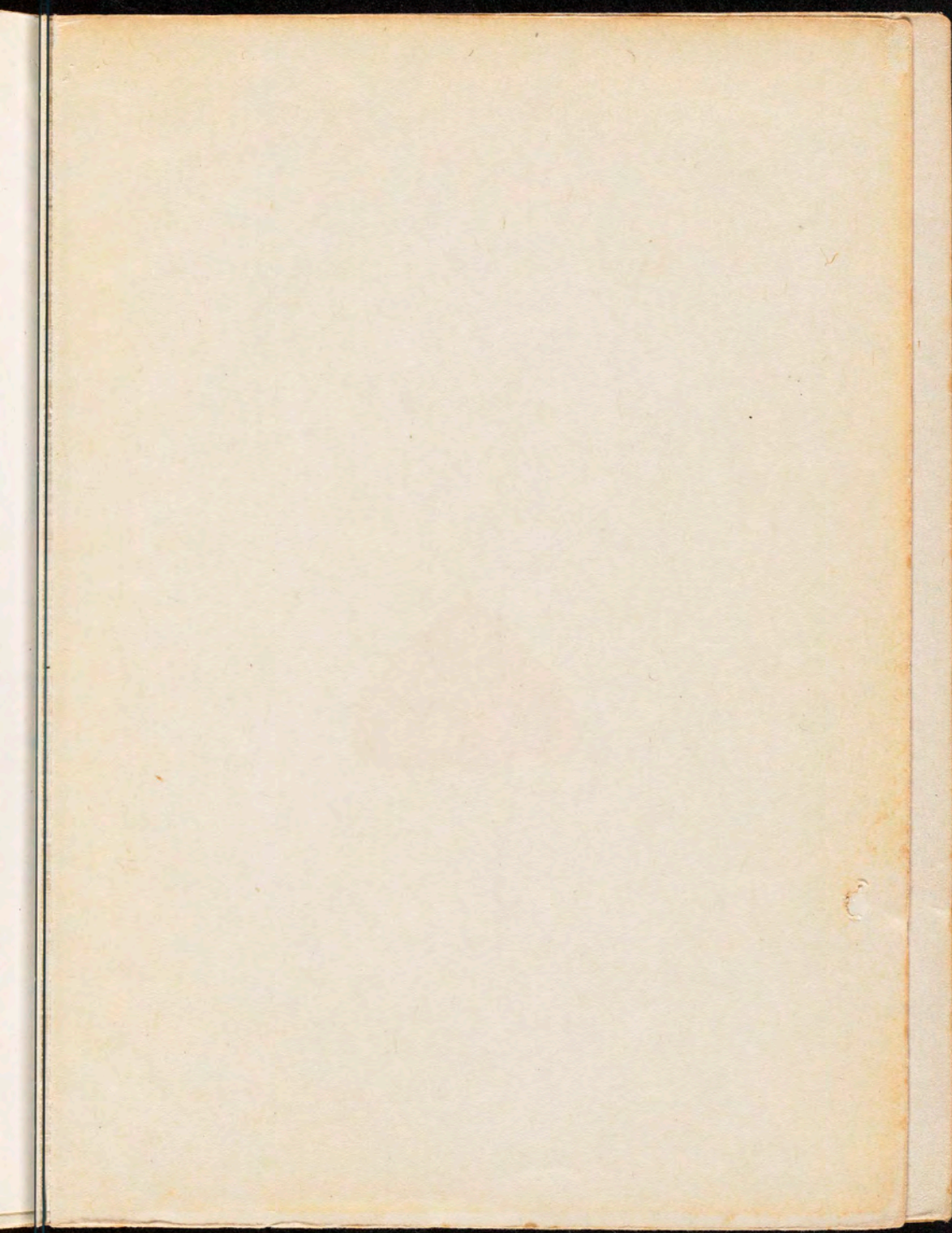
私共の故集を

田長教する少坂君は夫妻に贈る

大正十四年四月十九日

於ロンドンアイストン

中田伸歩





大 正 十 四 年

# 放 浪 之 詩

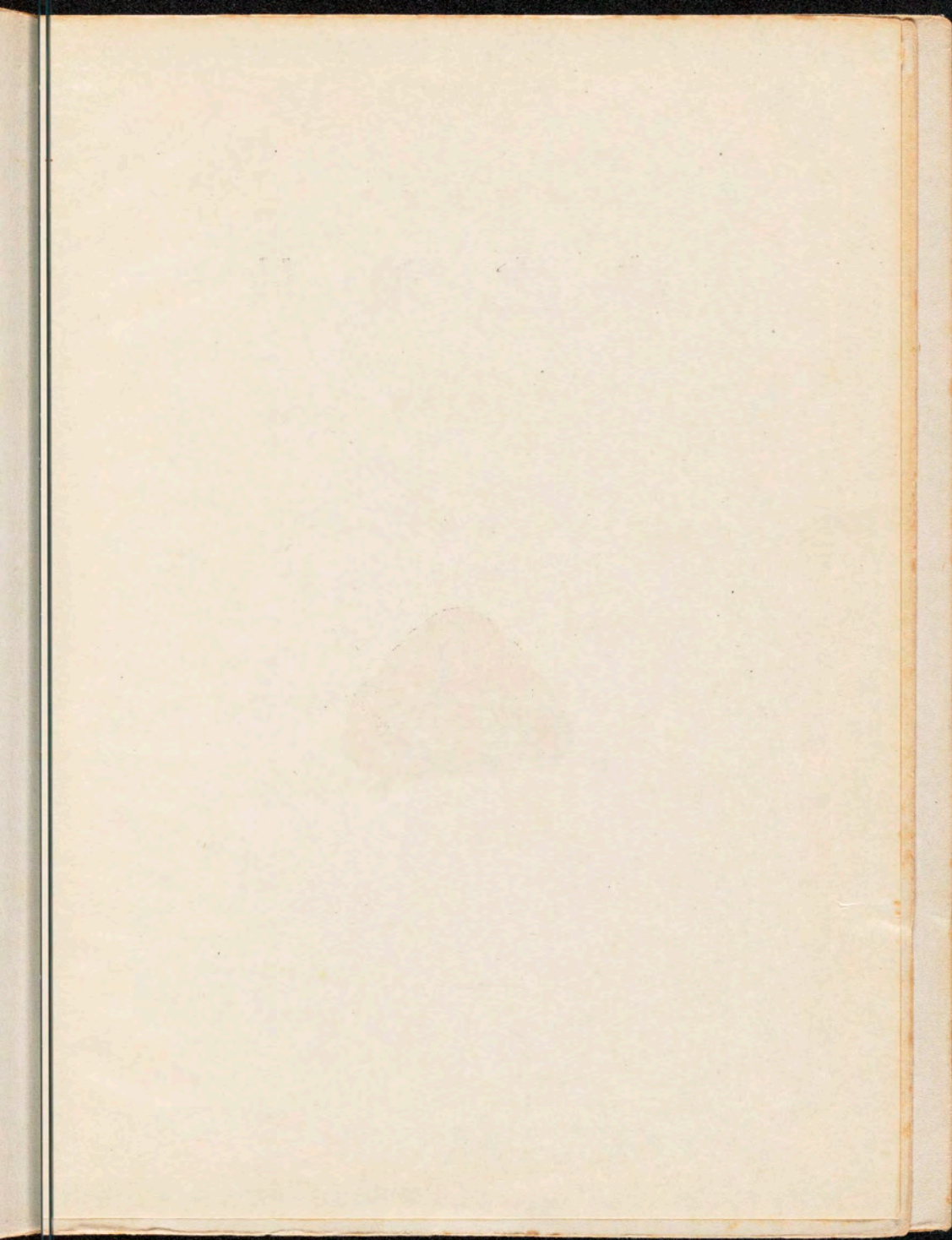
版 1925

放 浪 之 詩 社 同 人



---

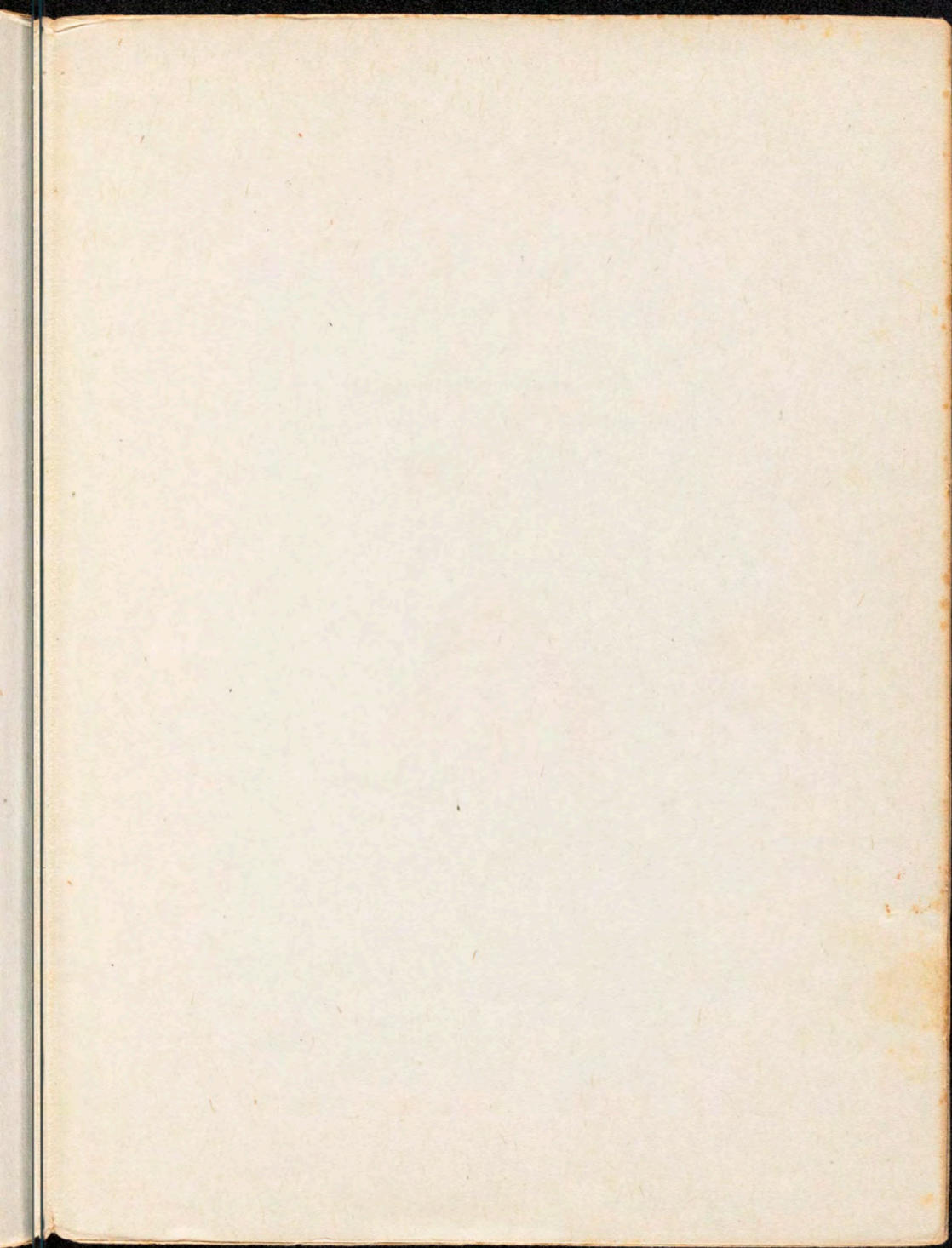
放 浪 之 詩 社 版





O soul of mine so piteously lamenting,  
Thou art not dead but only stunned awhile.

--*Dante*--





Ⅱ 異郷に淋しく逝きし

わが同胞の靈に捧ぐⅡ

幸德死影氏裝釘



目次

西村義雄

氷河の溶ける朝

山口精子

晩秋の夕景

冬の夜の唄

柳井伸樹

惜春譜

空華理想よ

加川文一

月光夜曲

豊かな野外

寂しき祈  
聖壇

夜

深更私の見たものは

母の恵み

### 高木不二麿

竹林内省

月下踏興

### 筋師與十郎

新らしき世界へ

在留同胞に與ふる詩（一）

在留同胞に與ふる詩（二）

第二世同胞に與ふるの詩

月



杉田創平

シイダの水  
旅の一夕  
ダリヤに寄す

栢野孝明

涯てしなき曠野を歩む  
放浪の友へ

脇水緑郎

狂へる幻想  
マーケット街を歩みて

芳賀沼美津留

木の葉の散る日  
自然禮讃

平田水村

深夜の雨

腰巻

なげき

罪

あの夜のさんげ

矢吹管城

人間の靈を抱いて

群集の中を

平田露草

寺

冬

移民情緒



今泉淚草

人魚を戀ふ

部屋戀

中山天恃

牧草の丘  
太陽棕櫚

中西格堂

一人ぼつち

野の夕  
小鳥よ

夕方

松本茂里池

夕の嘆き

絶望

二つの心

運命

慕ふ心

沼田新人

時の歩み

羅府

うるほひの日

木下青苔

春の訪れ

雨



中田伸歩

朝陽は昇る

私の追憶

或日の街と若人

樹心院眞道

旅愁の日

獨りの己れ

石川操

思想戦の肉弾

新婦人の十字架

佐藤一水

世紀末の聲

夜の沈黙の底から

塚本嶺南

懷しき蓬の葉よ  
廢れゆくミツシヨンの土堀

山崎一心

旅立つ日  
放浪者の詩



西村義雄

氷河の解ける朝

## 氷河の解ける朝

地球を埋めて居た大氷河が  
一萬年の冷蔵庫が

思想を氷らせ、痲痺らせて居た

哲學者、道德家、宗教家、藝術家までも

氷河に包まれた鯨のように

壯觀であるが失心し

生きて居るように見へても死んでいた

人生は幸福か悲哀か

自分には悲しい事ばかり

とかいて若い伊能は毒を飲んだ

『哲學の中毒』と人は言ふ。



藤村を瀧へ、隈畔は海へ、

大學生は噴火口へ、シャトルの青年は女と  
中毒の標題の下で

まだまだ大勢死んで居る

向ふから長い列をつくつた候補者が……

若い憂の眉、疑ひや否定の白髪

惱ましい指で掴み乍ら

いくらでも續いてくる、

魂は死なうとして

生きたい肉を無理に引きずつて居る

死骸には湯氣が立つてゐる

君に毒を盛り鉛を勧めるは

生存を無視する資本主義の哲學

資本家のため眞理を追ふ哲學だ  
だが人間は腹も減る戀もする

プラトーも佛陀も孔子も

形容詞のみ豊富な小才子の作文だ

何も言つてない、何も出来ない

シヨオベンハウエルもカントも

フイーテもゼームスも

死を圍む寒念佛。

苦悶の社會は倒れた馬車馬よ

波うつ腹は寄生虫バツサイトの舞踏場

王陽明も樗牛も禪もニイチエやベルグソンも

みんな顧みて他を言ふ哲學



勞働者よ

俺をどうすると叫べ

無産者よ生かしてくれと叱鳴れ

彼等は沈黙のストライキをやる奴だ

堪へられぬ若き戀よ

逼りくる壯年の肉の訴へよ

唾液の求め、胃の願ひよ

罪のない貧こそ大罪

今、

舊思想の氷河が末期となり

『空虚』で氷詰された老書生が

現實の太陽に溶ける惱み

自殺するに何の罪がある

精神に活きよと『化石』はつぶき

物質に耳をかすなと中世記文藝家は  
欺して居るうち

地球は俺達のものでない

お膳の魚は猫にひかれた

一体人間をどうするんだ

教會が靈を言ひ、有つ者が私産法を尊び

王様が忠を讃美するか

雨蛙の唄ほど艶がない

躓くなら足元に『物』がある

資本哲學の愛や人道や靈や信仰が

萬年試練のあとで未だ躓いてゐる



だが『物』がみへない、

悲惨な宗教よ、藝術よ哲學よ、

金色の殿堂の中で破産し乍ら

傲然として無産者を見下てゐる

皮ばかりの哲學、形容麗らかな愛の教へは

見てくれのよい毒饅頭

拵へる本尊さへ自殺して亡靈が青年を呪ふ。

今、萬年の氷河が溶け初めた

舊思想の行者達が十字をきつて誦法しながら

生命の大嵐に吹き飛んでゐる

氷河丘を押流す濁流

溺れる呻きから眞理を救ふ

綜合科學マルクスの哲學が出た

傷ましく離された

靈を肉に戻したデッウーゲン

自殺の蒸床<sup>ヘットベッド</sup>を覆すレニー

噫、

お前は慄へてゐる

彼等を怖い獣だと誰が教へた

『過去』への勇士

『未將』への臆病者よ

ビストル握る貴君<sup>あなた</sup>の目は

固く塞いで『新生の光』を拒絶<sup>こは</sup>んでゐる。



山口  
精子

晩秋の夕景  
冬の夜  
子守唄

## 晩秋の夕景

疲れたる陽はもの悲しげに沈みゆき  
一列に並びたる棕櫚の樹群は  
十字を切る聖者達の如くしづもりて  
夕べの祈りを凝す、

ほとほと、

わが心の邊を訪ふものゝ氣配あり  
厨に

野菜すゝぐ手をしばし止めて

秋の夕陽のひとつきを

せめてわれも

敬虔に充ちてすごさん。



## 冬の夜

黒い喪服をつけた

冬の夜が來ました

空には無數の星が

青い蠟燭を燃やし

地には宿無犬のような風が吹き廻てゐます

お這入なさい

旅の若い方―

扉をびつしやりとしめて

電燈をつけ

暖爐トスルを焚きませう。

明るい電燈の光は

暗いあなたの心の隅々までも

華やかに微笑ませ

暖かい暖爐の火は

凍えたあなたの心臓に

優しい温味を通ずでせう。

お掛けなさい

旅の若い方―

お湯がたぎつて居ます

熱い紅茶を啜りながら

あなたの身の上話を

うかがひませう。



暗い寒い冬の夜に

とりまかれて居る私共

忍耐<sup>しのん</sup>で

これを越さねばならない私共

夜は永い

路は遠い

もつともつと

心の底をひらいて

暖かい息に觸れるまで

話ませう

語りませう。

黒い喪服をつけた冬の夜に

すつかり<sup>とりま</sup>繞<sup>とりま</sup>られた私共です。

# 子守唄

春の夕ぐれ

搖籃をゆすりつゝ

子守唄うたへば

溫き心も春の夕べの如し

白いレースの窓掛も

壁に懸りし花の額も

もの靜かにして

子守唄のみただ

ほのかに

夕やみに匂へり、



誰としもなく聞きおぼえたる

素朴な子守唄！平和な音楽

母！あゝわが母！

なべての母の

涙と愛の歴史をつづる

古い寶玉にも例へたき子守唄

しづかに暮れ逝く春の夕

搖籃をゆすりつつ

ひかし憶えたる子守うた口づさめば

温かく

哀しき涙ぞ

わが心に溢れぬ

柳井伸樹

月光夜曲

空華

理想

惜春譜



## 月光夜曲

### 一

夜よ、星一つ出て居ない真暗いときに  
私の弟は深淵に身を投げて死んだ  
だが彼は勇敢だつたのでそうした狂ほしい心  
を仕末することができたのだ

### 二

夜よ、月の光にまたゝく草原の露を踏ながら  
だが俺のユダはどうしてかう  
臆病なのであらう  
だつて俺のキリストはとくの昔に賣られて殺  
されて居るではないか

三

水面の月景を破つて魚が跳ね飛ぶ

あゝ、戀愛がたとへ至上でも

それは希めない夢と消えてしまつたのだ

四

ひっそりとランプをともして

まづしい心を紙にうつすと

私の歌は捨てられて破れたバモニカだ

風に吹かれて鳴るやうな

五

夜よ、私の讀む本には

どうしてかうも悲しいことが書いてあるのだ  
らう



美しい若い聰明なアンナ、カレリーナは  
レールに身を投げかけて死んでしまつた  
それにこれからのロンスキーはどうしたら  
いんだ

六

夜よ、私の生前は

星も無く月も無く露もなければ虫も鳴かない  
まつ暗いお前に抱かれてゐる空氣のやうでさ  
えなかつた

死後もたぶんそうにちがいない

でも今は星があるから露があるから虫も鳴く  
から

私はそれらを歌はう

たとへ私の歌が捨てられた破れたハモエカで  
みぢめなさびしい音をたてやうとも

七

夜よ、まいばん俺はお前に抱かれるのだから  
もつといゝ關係でお前につながりたい  
こうして月光は惜しみなく漲つて居るが  
俺の手のひらにもこんなに美しく青くたまる  
のだが

俺にはどうしやうもないさびしさだ。



## 空　　華

風に洗はれて樹々の葉並から

ばらつ、ばらつと私の帽にこぼれ

肩にこぼれ、胸にこぼれ、頬にこぼれる

この風とみどりを溶かした露を

うすいすき透つたルビーの盃にうけて

光と匂とをうまく混ぜ合はしたら

時間を殺し處女をほゝえませ

からだいつばいに赤い花を咲かせ

うすみどりの翼を生やして空に舞ひのぼるや

うな

そんな素晴らしい妙薬ができればすまいか

雨に洗はれてつやゝかに黒い

ベームートロードに並木の影がゆらめき

いつの間にか私のミシンは

仙人のやうに伸通力で

しづしづと河の上を徐行し

私は故里の山の赤い椿の花の中で

幼情染の目白夫婦に

三々九度の盃をさせて居る。



## 理想よ

理想よ。私は待つて居る

お前が涼やかに私の視野に

ぼつかりと白雲のやうに浮んでくるのを

理想よ。お前はしかし

遠くの空の虹のやうなものであれ

なんらの慾望も起させず

しかもうつとりとひさつける

しづかな美しいものであれ

私はそよそよと微風のやうに

どんなにお前の方へなびいて

ゆきたいであらう。

## 惜春譜

いつの日にか私のみつけた

露とみどりの笛よ

いつでも私のくちびるに

跳ねて居る魚のやうにひびいた笛よ

笛よ

いまはいくら吹いても鳴らない笛よ

私のさびしさは

私のくちびるが荒れてしまつたといふこと

けれどもあなたは

また誰かのくちびるにひびけ

私はこうして荒れたくちびるを水にひたして



(あゝ魚の吐息がきこえる)

別れのなみだは今はにがくさびしいけれど  
やがてそれも消へてしまふ

笛よ

私はひとりて、またどこへでも行くであらう

加川文一

豊かな野外

寂しき祈

聖壇

夜

深更私の見たものは

母の恵



## 豊かな野外

今日は天氣が佳いので

夥しい人が野外に親んで居るが

まあなんとよく

廣々と展開した自然の新鮮さに

調和して居る事であらう。

彼等には感じ抜けのした所が無い

一寸見ても楽し相だ

從順しい瞳には異狀な耀が見える

玲瓏たる空と無限の沃野の

相映じた光景の中で

彼等はまるで

全てからだを乾して居る人魚の如う

抱合つた若い男女、

一人は顔を連れの足の方に向け

足は連れの頭の方に投出した儘

野天の自由を享樂して居る

寢えべつた二少年

晴れやかな表情の若い娘達

善良な老人

食べるのを止めて通行人を見守つて居る

幼子の顔

それには氣附かぬ母の顔

平日の仕事の故で恍惚せいりとなつて居る人

誰一人孤獨ではない



皆な或る甘美に浸つて居る

空氣は濃厚で

太陽は近くまた遠く

紅く見えたり綠色に光つたりして居る

私は

見えざる甘美に會釋しまた會釋した。

## 寂しき祈り

物言はぬ晩秋の空氣

肌寒い空氣の澱み。

牛乳屋の來た音がした

周圍が何となく沈んで居るので

世界の音がよく聞こえる

街路の氣色が殊に勝れない。

路傍で

土工が幾人か土管を埋めてゐる。

呼吸をして居るかと思ふ程落着てゐる

買物歸りの女連が通る

心配なさ相の表情だ



殊に眼が大きく美しい、

自轉車がそつと側を過ぎて往つた

子供も居る

寒い空箱の中で餘念なく遊んで居る

どうしてああ迄満足し易いのかと思ふ

空氣は何時迄もどんよりして居て

人の心には何か生きてゐる

この状態は晩方まで續く

來て見るがよい

誰れ一人不平を言はぬ世界。

## 聖壇

母のからだからは

夏いろのご光が射し

人間の肉體からは靈妙な光が

何處からとも無くづたづたに洩れ

木の肉に喰込んだ虫には

灰かな熱がともり

一輪の花一つの葉は

燦とした耀きに包まれ

冷たくなつた母のむくろ

どうしても信じられない

赤んぼうの死顔から



未だ餘光を發して居る悲慘。  
嗚呼、斯くも充ちたる世界  
燦とした聖壇

私は是の外の事は知ら無い  
誰れにも知られない

私の幸福よ

無智の詩人のよろこびよ。

## 夜

夜よ、

大きい夜よ肉的な夜よ

滋養に富める夜よ

お前は母の如くに凡てを育ぐむ要素と  
無限の愛を潜ませて居る

私は微に泪ぐんだ儘

お前と一緒に居る事によつて

全部を恵まれる

夜よ、大きく深い夜よ、私はお前の  
健かで良質の子たるを自覺する。



## 深更私の見たものは

深更私の見たものは

借地に底迷する暗雲のみでは無かつた

私はお前を

確實に見届けた

薄明るい黒い胡散げな者よ

生まなましい不思議な夜更けよ、

生と死の不思議な會合よ、

(まるで追立てられた者の如うに)

世界の凡ゆる意志感情の後姿よ

あの高遠な星々の

沈思よりもおだやかな

因縁的で内面的な永遠の私語よ

私は

お前を見逃しなかつた

私は今でも

どうかすると眞晝中

づるづると

お前に引張られて了う。



## 母の恵み

日々を無爲に暮す人々

黒く日にやけた労働者

彼等の衣服の直ぐ下には

母から貰つた色白な肌が隠されて居る

人知れず潜む白い肉體。

私は或時鐵道自殺をとげた若者を見た

何の爲永遠の左様ならを

告げねばならなかつたか

私には知れないけれど

灰色な腹部の曝出された

泪ぐましい光景は今も忘れ無い、

然し人々よ君達は氣附かない

死ぬる迄氣附かないで居る

その氣附か無いものは

夏いろの母の恵がたつた一つ

笑ふ時、語る時

愛し憎み、神を主張する時

希望を抱く時、絶望の時

仕事に向ふ時、喜びの時、災ひ疾病の時

悔悟、または劑藥、瓦斯で自殺する時

君達は

いかに完全に母の恵に抱かれて居る事よ

強くまた弱く生に對し



生を解決し能るこの潜在力

それは單に母の記憶や母に訓つた

人を愛したり神への信仰では無い

それは一部宗教家の考へて居る神や

世の道德などでは測り知れ無い

母の強さ大さである

母自身にも感知しない寶玉である

私はいつか其れを示さないでは措か無い

切込んだ血の出る所を

私は突附けて見せる、

おう、それも遠くない氣がする。

高木不二麿

竹林內省

月下踏興



## 竹林内省

若い者はこの竹のやうに、強く、自由に、大膽に暮すのがいい、若い時である、――若い時には。と、あの頃は、いつもさう考へた然し、この竹は、強く、自由に、大膽であつたばかりではなかつた。

この肌は、なんといふ、神々しい、憂ひの満ちた晴て明るい、沈着いた色であらう。

この姿は、なんといふ、正しき、而も、すなほな頼み甲斐のある、閑寂さであらう。

あゝ、午後の疲れに、ふと觸れて、私には泣けることばかりである。

竹の林に来て、友達が、石を投げた、私は  
おろかしく、それを見てゐたのである。

かつんーと、高く。音が響いた、ー  
朗らかに澄んだ美しい音が、そしてそこで、私  
は泣き出した。

私は慚かしい、あの、青錆で、静かに、佇  
む面にも、石が當るのではないか。

私も石を取らう。ー竹に投げるのではない  
私自身を、打つ、石を。

その家は、竹林を、脊にしてゐる。

そのお人は、孟宗と、共に、そよぎ、惚れ  
惚れと己を楽しんでゐる。

そして、その言葉は、さながらの、ひびき



を傳へ寂び澄んで、人の心に沁み入るのである。

あゝ幽かな、竹林の月光。

私は、つたなく、おろかしく、取柄もない者ではあるが。

せめて、そのお人を、羨まう、今日も、ひとり。

## 月下踏興

月の出を待たうか、

戀人を待たうか、

しえしえと跪き、さて、

お教へ下さる方はないか。

戀人も來やうよ、

私も行かうよ、

山の端の明るさよ、

あれ、誰か呼ぶよ。

戀人も月の下、

私も月の下、

さあ、行かうよ、



月の下を。

四十七日の、

尾花が末の、

蟲の聲、

わが立つまゝに音を忍び。

揺れ揺れて、

やまぬは、

薄、

月の出の細い細い葉。

草と共に、

揺れてしもたか、

あい、

月の下でよ。

梟の眞似して、

行けば、

いよいよに、

月は冴え。

山よりも、やゝ濃くして、

空の宏さ、

空に浮く、

月の影。

まあるく、まあるく、

まるささまわりて、

露の、

滴る音の幽さ。

滴る露の、



音さへも聞き、

仰げば、更に

月の明るさ。

更けて尙、

澄み明る、

光、

あゝ啼く鳥もある。

ひと聲は、

夢の影か、

いよいよに、

月は明るく。

# 筋師與十郎

新らしき世界へ

在留同胞に與ふる詩(一)

在留同胞に與ふる詩(二)

第二世同胞に與ふる詩

月



# 新しき世界へ

人類よ

汝は

その古い着物を脱ぎ棄てよ

幾千年著通しのその著物は

智識と謂ふ己が脂汗でけがれて居る

人類よ

汝は不快な憂鬱な顔をしながら

猶且つ

その著古しの習慣に未練をのこして居るのか

さあ今日こそは人類よ

その著古しの著物を脱ぎ棄て

『創めよりありし道』の

日光の洗禮をうけよ

そして

豊かな空氣に身をつゝみて

新鮮な力に溢ふれたその腕で

己が著る可き清淨な衣を織り出せ

さうだ

新らしい世界を生み出せ。



## 在留同胞に與ふる詩〔一〕

|| 加州土地法に憤慨して ||

わが熱愛す 在留同胞よ

貧血し衰弱した外面の所有者よ

世馴れない善良の民よ

なぜ君達は

他人の氣色ばかり窺つて居るのか

その落着きのない眼ざしを棄てゝ

どつかりと自分の椅子に寄り懸かゝれ

そしてナイフとホークを握り占め

地上の

神のテーブルの上の

皿の分前を食せ

この神の饗宴では萬人平等の賓客だ  
空腹にうなだれた在留同胞よ

君達の胃袋は大きい

そして空っぽだ

臆する事はない

神が萬人に與へた權利を――

ナイフとホークを握りしめて己の腹を満たせ  
そして想へ

神の――

君達の主人の竈は永久に豊かだ。



# 在留同胞に與ふる詩〔二〕

|| 移民法に憤慨して ||

檀原大和の國の

サムライの末孫達

今宵我ら膝を抱へ笑はんかな

間近か寄れ

うなじや冷えん

おゝ我ら

檀原大和の國の

サムライの末孫達

散る花の美を荒れしにあらねど

ハラキリを世界に矜る

血は未だ涸れねど

春はまた遠くあらねば

よしやよし

庭の木の葉の散るとてもよし

笑へかしからからと

そのかみの我等が祖父の

サムライの如く

笑へかしからからと

檀原大和の國の

サムライの末孫達

今宵我ら膝抱へ笑はん哉。



## 第二世同胞に與ふる詩

イエス彼に曰けるは我は道なり眞なり  
生命なり人もし我に由らざれば

父の所に往く能はず（約傳十四章三節）

群集は喧響と混亂の波を捲き起し

世はまさに再び

ノアの洪水によりて終末に近づけり

かゝる日に生れ出でたる兒らよ

吾等亞細亞移民の第二世よ

心して箱船を備へよ

おゝ海の彼方

さゝやかな嶋國ありて

彼處に兒らが祖先の幾千舵を握りし

朽ちざる箱船あり

幼き者よ

われら亞細亞移民の第二世よ

若草の如く柔らかな兒等が皮膚のもとには

生み殖え榮えゆく可き

ノアの兒達の生命の脈搏をわれは聽く

あゝ今し世は神に背きて

懶惰と貧慾の洪水に蓋はれたる

用意せよ強かりし祖先の如く

天孫たる自覺の箱船を

兒等よ

第二世よ



魂をすまし

風の如くしのび寄る滅亡の斷末魔の慘ましさを

を眺めよ

神の選民よ我が血を享くる者よ

兒等が箱船には

『創めよりありし道』の羅針計を備へよ

そして信ぜよ

道を眞を生命を

永劫滅びるの聖殿を

地上は兒等の有<sup>あり</sup>なり

勝利は神をうける者に歸す。

# 月

亞細亞移民の我等にも

月は祖母さんのやうに懐かしい

亞細亞移民の我等をも

月は初戀人の眠のやうに魅する

亞細亞移民の我等にも

月は神前の御酒の香りを滴らす

ああ我等亞細亞移民

歎くともせんすべしらに



歌はんかな歌はんかな  
ふるさとの祭に擬せて

月の光りの御酒の香りの  
酩酊によろめきつよろめきつゝ。

杉田創平

シイダの水  
旅の一夕  
ダリヤに寄す



## シイダの水

大地の鼓動に溢れ出しか

深山の精氣……

……透明色を湛へて

シイダの湖は耀きに輝く

蒼空を……白雲を……樹影を

青草は映りて

いよ／＼青し。

風に和し雨に閉ず

朝に夕に

各々の生物は

こゝに憩らふ

あゝ自由の表現よ

一如の心象よ

我が愛する

詩人の心胸にも似たり

遙かなる蒼空のもと

……都會に

ここゆゑ、一貫の清脈は通ず。

或者は赤く

或者は黄に

或者は黒く

或者は青く



或者は透明力を奉信す、  
ああ色々の思に飲まるゝ

透明色の水

誰か憎惡する者ぞ

愛人よ

知己よ

謹んでシイダの透明力を進む。

## 旅の一夕

陽沒れて

北海の荒波は

一入の暴れかた

港外の岬のしほしぶき

ほのかにも

町の十字街に迷ふ

―午後十時―

荒磯の小邑

夜の粧に甦れば

懸命の業に疲れた人々が



此處に集ひ

暫時の歡樂

女、密賣酒、賭博、

苦うたれつゝ

明日もまた船に乗る

哀れ土着の人々

色々の顔色の動く

明るき街路の一隅に

黄なる顔の旅人は

思ひ深く佇む。

# ダリヤに寄す

表現の陷穽に落ちしものの

美々しき粧ひ

ダリヤの惱み

輪は大きく

色は深紅

日に輝けど

そのかみ

自然の野に

微笑みして

勾ひはあらず。



柏野孝明

涯てしなき曠野を歩む

放浪の友へ

## 涯てしなさ曠野を歩む

蜜の様な甘味に充ちた  
すばらしい幻が消えて  
餘りに淋しい  
現實の視野が  
私の前に展る、

新緑滴る若草もなく  
渾々地底より噴き上る  
オーシスだにない  
涯なき大地の究極より  
無窮永遠の彼方に連なる



淋しい現實の曠野に

私は唯一人で歩いて居た、

西に行く可きか東す可きか  
それすら全く判らない

唯一切不明の内に

私はとぼ／＼と歩いて居た

渺茫たる曠野を照らす光には望があり

大地を渡る風には

愛がある様にも感じられる、

ふと彼方から人が歩みよる

美はしき乙女だ

『妾も連れて歩んで下さう』

憧憬と哀願に充ちて彼女は言ふ  
私は彼女を伴れて歩む

蒼く澄んだ大空から

金色の光輝く奇しきものが

私達二人の上に落ちた、

小さい、小さい人の子だ

彼の小さい目と口は

私達の仲間に入れて呉れと希ふ

私は其の子も連れて歩む。

無と有の兩極に連鎖する



明暗定まりなき曠野を  
私等のグループは歩む、  
静かに憧憬れを求めて、

大地を渡る風には愛があり  
私達の立つ曠野を照らす光には  
望がある様にも感じられる

# 放浪の友へ

旅から旅へ

轉々君は漂泊ふ

原始の曠野より

文化の都へと

時に曠野の明月

戀郷に惱み

一片の野花に語る

放浪の悲哀を

文化の都に



君は何を見る

虚偽と矛盾と不正の錯雜

虚榮を追ふ女

功利に狂ふ男

鬭爭、陰險、譎詐

君は遂ひに感ず

我が住む地ならざるを

而して去る

再び自然の懷へ

蒼窮を魔す峰の巔き

荒野に微笑む一軟の野花

あう自然よ大自然よと

君は伏す大マイテイーの前に  
静かに扉は開かれ  
真理の燃火は輝く。

君よ、

歎く勿れ放浪の悲哀を

自然は默示す

漂泊ふ君の上に



脇水緑郎

狂へる幻想

マーケット街を歩みて

## 狂へる幻想

愛が眞實であり

情勢が理智に光つてゐるとき

戀愛は純潔なものでせう

たとへ、あらゆる苦痛と貧困が私しの身に  
襲來しやうとも

私は野原にさゝやかに流るゝ小河のやうに  
堪え忽ぶでせう

森の牧人は死むでも

野兎を愛するものは、彼れの遺せし笛を  
何處かで吹くであらう

土と愛と眞に生るゝ、いましよ



よし、健康が害はれ、貧困に陥るとも

詩人の幻想と愛の報酬と生命なるコンボース  
によつて

いましの靈は慰さまれるでせう

（土に生き、土を愛するものはまた人間を愛  
する）

そなたは、今、どんな書物とお友だちと

幸福をもつて、いらつしやいますか

無花果の葉が黄くなり、縦の實が熟する秋

渡り鳥が黄昏の空にその姿を消すとき

あなたは、故里の妹のかわゆらしきを

涙に思つてゐいでですか。

# マーケット街を歩<sub>て</sub>み

…桑港にて…

黄昏すぐる頃

夕陽が赫く空を染むる頃

わたしは

屢々主<sup>メイン</sup>要<sup>ストリート</sup>街のマーケット街を

とぼとぼ歩いて通る

わたしの口にくわえてゐる

煙管から立ち昇る紫紺の煙

それは私に藝術を

慕ふ心を起さしめる。

米國の街頭は偉大である。



夕陽に映ずる高大な建築物と

廣いアスハルトとコンクリートの道路と

輝き連るイルミネション

そこに意匠をこらした人工の藝術がある、

電車が通る、自動車が続いて走つて来る

人は人道キドウオウを歩く、

行く、来る、走る、去る、止る。

右と左に

雑騒と喧騒を極めてゐる

それは文明の縮圖である

この混沌たる人間社會にも

人間の秩序があり

意志と目的がある

自然が人間に與へた精美と

人間の墮落が見出せる

風体スガイのいいすらりとした白人の紳士が通る

血色の勝れた米國の水兵が

小さい白い帽子を

横つちよに被つて二三人

はしやりでやつて來る

アメリカの所謂うらわかい令嬢が

スラスラと歩く粹な姿と

香水の匂ひ

花色の頬、お菓子のような顔

微笑ほゑんだ視線



年老いた寡婦らしい婆オランダマが

活動寫眞館の前に佇んで

看板を凝視してゐる、

エムボリーアムの大きな陳列窓が

日本の銀座の三越を偲ばせる、

華麗な婦人の流行ハットや

紳士の素敵な灰色の洋服と

ネクタイと杖が奇麗に陳列されてゐる。

わたしは、とある煙草屋の鏡の前に立つて

自分の姿形を映して見る、

鏡は誰れかれの區別なく、

人の外面の姿形と心の姿を

ありの儘うつす、

深切、優美、醜惡、諂ひ、威嚴、慇懃、  
様々な容貌と姿形が自分の心の目に  
走馬燈のやうにうつる

不圖わたしの目が玩具のやうな

色とりどりの菓子キャンデーに移る、

キャフエテリアは奇麗で涼しい

それから地下室のグリル

街角の煙草屋から出てくる

葉巻を口にした体格の好い老紳士、  
後に何やらの氣配



そと振り返れば二人連れの若い男女

長時間の勞働に疲れたとも思はれる

勞働者が悲慘な面持ちをして歩いて来る。

盲目と札を頭に掛けた嬉しさうな乞人が

帽子を前の方に差出して

黙つて道の隅に立つて居る

風體こそ汚いけれど凛々しい

美少年の新聞賣り子が

クロニクル クローニクルと高い聲で

客を求めてゐる

薄桃の顔と赤黒い顔

華美な化粧と薄化粧、

まろやかな肉体美と

骨ばかりの貧弱な身体

破れてみすぼらしいパンツと

高價な褐色のスカート

すらりとした圖體と醜い圖體

元氣潑瀾たる顔と影の薄い面

頑丈な体格とセムシの不具者

是等の對象は

人生の悲劇であり

人生の喜劇でもある。



芳賀沼美津留

木の葉の散る日

自然禮讃

## 木の葉散る日に

お母様——ご覧！

木の葉が散つて行きます、

霜の爲に枯れた木の葉が

みんな土に還つてゆきます、

お母様——お聞きなさい。

落ちた木の葉を踏んで歩むと

淋しい音がします。

過ぎ去つた日を憶ひ起させる様な

静かな懐かしい音ですね。



お母様——

日本の家の裏の柿も桑も

今頃は

みんな散つて了つたでせうね。

あの木の葉の散る頃

幼い私達は

何をして遊んだつたでせう。

暖かい炬燵の中で

アメリカのお父様のお話を聞いたのも

遠い遠い昔ですね。

『アメリカと謂ふ國には

ほんとうにお父様が居るのか知ら』

と疑つたあの幼い頃——

お母様

私は彼の頃の自分の姿がいぢらしくてなりません

お母様も淋しい人でしたね、  
でもお母様

あの頃と今とどちらが幸福でせう  
何だか

私には今一度

あの幼い頃が還つて来る様な氣がします。

お母様

木の葉が散る度び毎に私共は  
年を重ねて行くのですね。



來年の春

再び緑の葉が繁つても

もうこの散つた葉ではありませんもの。

お母様

ご覽！

木の葉が散つてゆきます

異國の秋が暮れて逝きます。

## 自然禮讃

(自然を憎むの筆者に捧ぐ)

時が流れて行く――

人に遇ひ――人に別れ

人を愛し――人に愛され

人を恨み――人を憎み

そうして私共が生きて居るのに時は何とも言  
はずに流れて行く

移民地に生くる多感な私共が過去の戀に泣か  
うと

未來への希望に胸をおどらせ様とも、自然に  
は何程の相違を來たして居るだらう。



だが私共が

秋の末に落葉の悲哀を歌ふとも春の月に緑したる歡喜の歌を歌ふともそれが彼等に取つて何程の感じがあらう

私共が自然の流れに従順であらと——叛逆し様と——

そうして私共が自然を愛する事と自然を憎む事とに何程の相違があるだらう——

私共に春を教いて呉れるのも自然だ——春を奪つて行くのも自然だ——

自然禮讃——自然禮讃

やがて自然は私共に何かを教へて呉るだらうそして何事をも忘れさして呉れるだらう——

平田水村

深夜の雨

腰巻

なげき

罪

あの夜のさんげ



## 深夜の雨

吾れは唯ひとりして

深夜の街に

あやしくもみだる雨の音を

しみくとして聴き入りしに

あるわびし

さめざめとすすり泣く少女の

美しき涙のそのごと響きぬ。

この深夜

悩ましくも降りしきる細雨の

しめやかなる音をさく

悲しきわが心よ、

暗き硝子戸を透かし見れば

深夜の街は墓場の如くかげりて

小止みもなく降る細雨は

淋しく

今宵ひと夜をしめやかに

降りてあらなむ。



## 腰 卷

赤い腰巻がベッドの上に  
投げ捨てゝある

眞赤な腰巻

若い女の肌を包む腰巻

俺の胸は

其の腰巻を見ただけでどる。

# なげき

花びんと知らで

みざくらは

果敢きや後に

實をつけし

あきらめつゝも

夜の夢に

君を見し日の

わがなげき。



## 罪

犯した罪の恐ろしさに

悶々苦しむ

終に神に懺悔して

救を求めたのは

昨日の朝だつた

だのに早や今宵

俺はまた彼女と

かゝる罪を犯さんとは

あゝ神よ

一體人間はどうすれば

この慾情を制へる事が能さるのか。

## あの夜のざんげ

美しく輝いて居る

花電燃の下

お愛さんは静かに

肉つきのよい身體を

私に靡せかけました

私は振へる手で

堅く彼女を

抱きしめて紅い唇に

接吻をしました。



矢  
吹  
管  
城

人間の靈を抱いて

群集の中を

## 人間の靈を抱いて

私は自然に瞑目する

深山ではないが

山の香氣に接すると

私は何んだか超人めいて来る

嫌惡な都會の喧噪の中に

皮肉な微笑が

悶へ苦るしんで居る

さうした靈が

此處で自然と謂ふ力に

超然と瞑目する

(靜かに靈が淨化されて来る)



一つ一つ小さな

自然の囁を聴く

豊かな地上に生る

蒼然たる草樹も

自然の恵みのもとに

伸び繁<sup>しげ</sup>茂つて居るではないか

時折り鳴く小鳥すら氣儘な唄

綴り重つた樹葉から洩れてくる

太陽の光さへ

無心の法悦に浸つて居る

ああ都會人は今を春と言ふが

此處は秋めいた春の景色

樹木の根本草葉の蔭に

名も知れない草達は伸びる

―かすかに靈が踊り狂ふてくる―

斯くて静かに夏秋冬と謂ふ季節が

草葉の蔭から訪れて来る様な氣がする

私は暫時彷徨ふ足を止めて

伸びつゝある小さい草達に泪ぐむ

想へば

矢張り私も小さい草に過ぎない

私は小さい草にみとれる

(さびしい人間の靈を抱いて)



## 群集の中を

哀れな者と思はれるわたしの爲めに  
幸福の世界の

扉を開く鍵を

握つて居る女に會ひはせぬかと

淡い空定めの心を抱いて

華やかな群集の中に

今宵も出て來たけれど

まぶしい裝飾の光に漸く

其の存在をみとめられた。

無言の形像のように淋しい私の姿に

執念深く追つてくる

群集の罵笑を

はらひのけ、はらひのけ

何物にも目をくれず群集の中を大股で歩く

ああ白晝の勞働に従順な瞳は

斯んなにも鋭く血走り

私は群集の中を走つてゐる

戀情の嬌態を流すところの騒ぎではない

私は今宵も

空定の女を探し出す事もなく。



平田露草

寺

冬

移民情緒

# 寺

寺のさびしさは  
朱のはげし木魚

煤けし經櫃

心落ちつけど  
寂しさがくる。



## 冬

西湖公園には

何時の間にか

沈み切つた冬が來てゐた

腕を組んで歩む人達も

會社員らしい若者も水兵の群も

みんな一樣に

透明な空氣の中を歩いてゐる

誰も慾望から離れて

今更のように

敬虔な心で

自然の愛を受け入れてゐた

シーガールも針金のやうな足をそろへて

動かぬボートや

赤い屋根の上で

沈黙したこの冬を

寂しさうにちつと見つめてゐる

魚もこごり一つ立てず

セビヤがかつた

浮草の根元で

さびしい冬の黙禱をしてゐる。



## 移民情緒

彼は性慾に飢えた者の

どす蒼い顔と

血走つた眼を

ずるく、そしていやしく

行き交ふ凡ての女性に向けて居た

裏切られた戀を諦め得ぬ者の

せき止め難い憤怒と嘲笑

女への呪ひの眼だつた。

しみだらけの團栗バンツ

かたちびした仕事靴

深く両手をポケットに差込んだ儘

夢遊者のように

あせた支那街煉瓦長屋に

寄り添ふて歩いてゐた

長いパイプで糞<sup>たばこ</sup>を吹かす

南京老人

線路を横切つて行く

メキシカンの屋臺車

こうした群たちと

紅く暮れ逝く空とは

調落そのものゝ晝だつた。



今泉涙草

人魚を戀ふ

部屋

片戀

## 人魚を戀ふ

たつた一枚のグラスだ

諦めて居よう

赦されないものを

無理に求める要はない

お前と俺の歡びは

同一のみに幸福を求める。

小さい壘だ

もつと近くにおいで

そして

此のグラスを挟んだ儘

接吻をしやう



肉と肉とが觸れなくとも

唇が觸れ合はずとも

愛し合ふ私達の心は同一なのだ

一枚のグラスは弱く

私達の愛は強い

がお前は水の中

私は水の外だ

苦しくとも私は

冷い運命の彼方に

憧憬れつゝ

寂しい道を進もう。

## 部 屋

それは

あり得ない事だ

男は諦めつゝ

我家に歸ると

淡き微光に

机の上をのぞき見る、

何の用もないのに鳥渡きて見たのよ、

録された一片の紙に果てし無い追想

静かに机の上に窺ふ若き男



それは充られぬ

ロマンスを思慕する

幻想の淋しさだ

男は淋し相に

昨夜の机の上を窺つたが

部屋の中は

永遠に何の微動もなく

力ない若い男の手で

灯はつけられる。

## 片戀

果敢なき想ひなれど

爽かに觸るゝ心の戀

またしても

思ひつめられて苦るしい

幾度か

うち消しては見るが

矢張り充られない

戀の姿は

私の知らない

他の世界に

美しく浮んでゆく。



中山天恃

牧草の丘

太陽棕梠

## 牧草の丘

牧草の咲いた海岸山に

私はじつと立ちつくしてゐた。

春の陽は落ちて

あか／＼と空は彩られ

加特力教會の白い建物は

暗い陰を織出した、

なく虫だに無く

同情、戀愛、性慾へと

若い男女がもつれて行くやうに

大きな自然の夕闇の中に



吸はれ果つる物象のかずゝを  
じつと私は見つめてゐた。

晝と夜との境目の味氣なさ

今若し鐘がなり出せば

私の魂は哀に口吻するだらう

あゝ生命のスィンクスをたぐりもせて

或はそれに中毒して

居常、靜に動に封ぜられたる人間かな。

川に流るゝ水は白く光り

月なき空に嘯いてゐる

古びたる衝動のフィルムを展べもせて

聖書一卷を抱きつゝ

極く平凡な面持で

私はちつと立つくしてゐた。

小さい人間の争闘

いくらかの交渉と無關心

そんな事を常業として居る彼等の何れもが

詩も作らず

神をも知らず

死の淵の夕闇にうごめく。



# 太陽棕櫚

(グレンデールにて)

太陽棕櫚！

何といふよい名前と

よい風姿でせう！

彼の八月のある日

人から買はれて行つた

三つの中の一つの

その太陽棕櫚よ

植物の運命よ！

緑濃き幾條の葉が

南國の清涼を想はせ

文化生活者の軒に置かれて

歡賞を受くる

憧憬そのものを表象した様な彼の太陽棕櫚  
植物の運命よ！

彼女は月の世界から生れて來たのでせう！

彼女は何故私の讚美の的たるか？

卓越せる天分の持主よ、

私の太陽棕櫚よ、

私の運命へと解放されない君よ、

月の中の桂の君よ、

斯うこれから幾人が

歎嗟の言を繰るでせう、

彼の八月のある日



人から買はれて行つた

三つの中の一つの

その太陽棕櫚に似た

一人の若き女性よ！

『お寄りなさいまし』と、

聲を掛け給ふが常なる

なりき、

あゝその明るい聲の持主の

順子さんよ、

然はあれ

天分圓かならぬ我は

自らの道に人を求むならん

彼の太陽棕櫚に似たる君よ、  
我等、

御身を見ん事を願ふ

實に喝仰と讚美、

鳩の温和、研學の空氣、

これ等に潤澤てゐらるゝ君は

如何程御身の絶大なる個性の祝福でせう！

我は君と一つにてはあり得ざりしよ、

何事も語らず、

何事も讀まず、

少し計り禮儀上の微笑を交し私達は、

彼の太陽棕櫚が、

十月の朝のそよぎにそつくり。



中西格堂

一人ぼっち

野の夕

小鳥よ

夕方

# 一人ぼつち

父様戀しい

海きわの際

お月に言傳ことづけ

たのもうか

アラスカ島は海の際

母様戀しい

丘の上

お墓に向ふてもも

の言はぬ

千年萬年



丘の上

私のお家に

わし一人

父様戀しい

海の際きど

母様戀しい

丘の上

## 野の夕

静かに夕陽は落ちる峯の頂きに

静かに夕陽は落ちる心の上に

すぐに四隣<sup>あたり</sup>は紅に埋るだらう

紅の中に緑は夢む紅の中に

どんなにお前は疲れて居るんだ美しい子よ。

するする夕陽は流る心の背<sup>せ</sup>に

するする夕陽は流る頬の上に

湖水の上の灯の様な心臓<sup>こころ</sup>

照り疲れた憂ひ疲れた

どんなにお前は美しく眠るだらう若き子よ。



## 小鳥よ

黒い闇が犇々と

四邊に迫つて冷たい風が吹いて來る  
風よ風よ何故<sup>なぜ</sup>そんなに吹き荒むのだ  
歌ひ疲れた遊び疲れた

可愛い小鳥が夢見るとき

風よ何故<sup>なぜ</sup>そんなに意地悪く吹くのだ

小鳥は顫<sup>ふる</sup>へてゐる戦<sup>いくさ</sup>いてゐる、

煩<sup>わづ</sup>へてゐる飢<sup>う</sup>えてゐる。

湖水の傍の萎枯れた

草の中から飛び出した

たつた一羽の親なし鳥よ

お前は何處へ行くのだ

暗の世界は其處まで來たに

小鳥よ今夜の泊りは何處なの

靜かに忍べ

軈て風は止むだらう

星も出よう

また明日も來よう

たつた一人の連れなし鳥よ。



## 夕方

夕の帳が下りて来て

あたりは暗くなりました  
角の菓子屋に灯がついた  
坊やの家にも灯がついた  
もうじきババの歸る頃。

松本茂里池

夕の嘆き

絶望

二つの心

運命

慕ふ心



## 夕の嘆き

ああ若人の涙は乾き  
血はあせて行くのに  
野邊は緑に  
花は赤い

あゝ陽が沈む  
無駄な日が  
暮れて逝くのだ  
昨日よりも、より  
大きな絶望を残して。

## 絶望

詩も歌も出なくなつた  
頭の中は空虚だ

今に

血も涙もなくなる時が来る  
それは確かだ

その時だ

俺は高らかに歌ふ

反逆の歌を

俺は禮讃しよう

咀の宗教を。



## 二つの心

草葉にすだく

虫のねをきく秋の夕

私の心は

ある崇高なものを

求めて泪ぐむ。

赤い花傘の電燈が

爛熟した女の頬と

酒のカップを、ほのかに染める、

あゝ、酒と女と唄。

だが、どうする事も出来ない

二つの心。

## 運 命

寂しい野路を私が歩いてゐると  
ふと私は

虞美人草の花を見つけました。  
私の心は喜びで満されました。  
だのに

さつと一陣の風が吹いて來て  
たつた今摘んだばかりの

虞美人草の花を

散らしてしまいました

ああ、それは果てしもない絶望でした。



# 慕 ふ 心

闇に泣く身も

君在さば

お空に輝く

星一つ。

うき世の波に

もまゐる身は

君こそ救ひの

舟一つ。

沼田新人

時の歩み

羅府

うるほひの日



## 時の歩み

ひとときの勞働を終へ

疲れし軀を

静かに慰ひて

晩秋の月を眺むれば

逝きし日の夏

記憶の裡に蘇る

クルミの葉は

音なく落ちて

凜寞は我れを

幻想の世界へと誘ふ

懐かしき過去よ

甘き追憶のひとときよ。

顧みれば

廿有餘星霜の日眼前にひらけ

幼時の樂しさに心笑む身は

異郷放浪の辛慘に泣く。



## 羅府

日中の雑音は

何處かに消へて

大自然は静まり

百万の靈、大羅府は

静かに眠れり

聽けよ彼女の呼吸

若き心臓ハートの鼓動、大地を響かせて闇の中

歡樂と肉に酔ひし

彼女の憂ひ

醫やされざる

近代人の悩みを。

# うるほひの日

雨、雨、雨

うるほひの日が來た

是の日

若芽は威勢よく

地殻を破つて

春を醒まし

歡喜びの聲をあげた。



木下青苔

春の訪れ

雨

## 春の訪れ

淡紫の東雲の空

猫柳薄く煙る邊り

朝靄の間より淡く

浮出せる農家

時折歌ふ鶏の聲もゆかしく

薄淡く立昇る朝餉の煙は

畑を撫で來し清き微風に

搖るゝともなくなびきぬ。

霞に煙る遠近の山々

陽は麗かに照り



空は晴れ

今萌え出し若草の絨氈に  
陽炎うらうらと燃へて  
春の晝は長閑

陽は既に霞に暮れて

溫き夕風頬を掠めて去る

夕焼雲に彩られし空の

彼方に宵星の光微かに

宵の鐘は長く餘韻を引きて

春の夜は靜かに更ける。

## 雨

西山の端の紅の空が

淡紫から淡黒色に變ると

上空の眞黒い岩雲の隙間から

星が微かな光を放つ

肌寒い如月の夕暮に

頬を打つ雨は思はず首を締めさせる

陽春三月の宵や晨に

屋根を鼓く雨は彌が上に眠氣を誘ふが

野外の草木には速く醒めて

新緑の粧ひ凝せと



女性の夫れにも似たる  
温かく柔かな手もて  
静かに静かに揺ぶる

花の精の化身か

春の女神の裳裾にも似し  
爛漫と咲いた櫻の花を

一夜に荒らす卯月の雨は  
無心とは謂へ憎き極

蛙の聲と和し

そぼ降る五月の雨のしめやかな音律は

幾千年前から

自然の奏する不變の音楽だ

何万何千何億粒と

絶へ間なく降り注ぐ白玉は

點い大地に消へて

森羅萬象すべてのものを

冷やかな腕かみもて抱きしむ。

朝晝、晩と

小止もなく降る梅雨つの頃は

滅入る如き鬱陶うつとしさを

人間の心に植附けて行く



七八月の炎暑

黒雲俄かに空を覆ひ

疾風雷鳴と共に沛然と降り注ぐ夕立は

眞に黄金の雨

男性的の威力に草木は甦る

小山や岡の木立を訪ふ

長月の雨は淋しいが

木枯に伴れて裸木をたたく

神無月の雨は

淋しいと謂ふより寧ろ悲痛だ。

中田伸歩

朝陽は昇る

私の追憶

或日の街と若人



# 朝陽は昇る

静かだ

世界の果て迄が

明け渡る朝の静けさだ。

真紅の東雲が霽霽たる朝霧と共に

静かに晴れゆき

紫の山は繪の様に聳へたつ

朝。

微風だも吹かない。

朝陽は、今ぞ昇る  
眠れる大地の上に  
狂人は亂舞する  
照れ、輝け

明け渡る朝の静けさに  
大地は今ぞ、朝陽を仰いで  
萬象は法悦の中に浸る。

鬱蒼たる千古の森林の中に  
燦爛たる朝陽は今ぞ昇る  
亂舞する狂人

巨人の神秘と静寂さは



今、靜かに晴れ渡る  
朝、

朝陽の莊嚴よ。

照れ、輝け

亂舞する狂人の微笑み。

## 私の追憶

真暗い闇の中に

私は

たくさんの星と灯を眺めて居ました。

遠い世界の涯で

星は泣いて呉れました

灯はまたたいて呉れました。

私は凝つと闇を視つめて

涙ぐみました。

『今夜ぎりでお訣です

何時またお目にかかれるでせう』



流動する者の心に

皆さまの

何んと言ふあやさしさてせう

何んと言ふごしんせつでせう

私は闇を凝視めた儘

感謝と感激に

むせび泣く私の心を抱きしめました。

おう、遠い世界の涯で

星も

嬉れし泣きに泣ゐて呉れませう。

灯も喜んで呉れませう

旅する者の心に

何んと言ふあやさしさてせう

暗い世界に

あう星が

そして灯が

嬉れし泣きに泣いて呉れませう。



## 或日の街と若人

眞夏の陽は

今、眞赤に照りつけて

古ぼけた建物の蔭影が僅かに

細長く延びて居る

砂塵の蒸し臭い匂ひに

照り返す陽が眩しい。

だらだら坂の眞晝。

若人は、知人の無い寂びしさに

疲勞した敗殘者が

歩む様な足どりで

あどあどと細い蔭の下を歩んだ。

蒸し返す様な暑苦しさ

に若人の物憂ひ心には

凝視する世界は遠い

『おう、私は寂びしい』

私は充たされぬ

『私は孤獨だ』若人は呟いた。

陽は赫々と照り輝いて居る

だらだら坂の眞晝。

若人は

上から下へ、下から上へ

だらだら坂の街を歩んだ



其處には慌しい時が一律に展開し乍ら  
人々の醜惡な人生への執着から  
現實が絶えず苦るし相に  
轉換して居る

自動車が

男が

女が

其して子供迄が通つて居る

慌しい『生』への争闘では無いか

めまぐるしい争闘のシーンでは無いか

若人の物憂い心には

今、凝視する世界は遠い。

『嗚呼、私は淋しいー』

若人は眞夏の空を仰いだ  
陽は照り輝いて居る  
だらだら坂の眞晝。



樹心院眞道

獨りのちのれ

旅愁の日

## 獨りの已れ

愁ひて

初夏の朝よ

棕櫚の太根の腫の心地よき

人は――

唯、一人の己れに

曉闇の静けさを

沈黙の祈りに掻き亂だそうとする

紫の一瞬

そは、己の破壊か？

墓か

あゝ花冠の亡者よ



己の冷たい靈魂

かそけくも

打ち震ふ

ゆきずりにみとめし

路傍の光明よ、

涙――

唯一人の己れに

梵の行脚に

あのれの疲れた足踏み

労働の夜が明ける

俺は矢張り一人だ。

## 旅愁の日

退屈の日なり

煩ひに

悶えど

あは……更らに

我が胸暗れじ

傷づける貧しき心よ！

いかにしてか

斯くも憂ひ多き

人皆なほ、笑めど

地上の万物一つ一つに

饗宴の電飾が輝けど



我が腕、我が頭、我が口唇、  
そはいたましの

かわける

夢の涙にしあるか

暴風の狂氣

恐怖の現實

血に染みし人間の魂の躍動

あゝ……

はらからよ

涙の洗禮に

久遠の秋がさゝやく

飢えし月の暴虐

尊くも

聖者のねむり

山頂の乞食は

雨を乞へど

食するパンにはあらじ

田の水ひけど

稻は實らず

谷深けれど

鹿は住まじ

悲し……

あゝ……寂びし

ひねもす我れ歩めど

羊來らず

光り高ふして



闇の夜は近づく

暁の下僕よ

浄められたる暴君よ

我れに一人のホトケなく

めぐみを呼ぶ角笛もなし

溜息して

思ひ煩ふ

若き日の戀よ

波をへたてゝ

群青の海を

ひたよする

旅愁に……あゝ

我れはさすらふ

我れ一人なり

貪しき心の一人なり



石  
川  
操

思想戦の肉弾

新婦人の十字架

# 思想戦の肉弾

(菊地郁次郎兄に捧ぐ)

唯物史觀の戰士

唯心論の智者

それは、まことの

人類の奉仕者

それは眞劍な

文化の創造者

現代文化の源泉は

敬虔にして勇敢な

選ばれた人々が



生命を捧げて築き上げた

努力の賜だ

血と涙の結晶だ。

南加先輩に

哲學はない

誇る法律家に

法理哲學の頭がない

思想は貧弱

言論は低調。

清新の若芽は南風に濃い

コバルトの空は

美しく凄い

時も時

天來の光輝は閃いた  
情實混渾の

南加の天地に

唯物、唯心の群は

思想の肉彈を

互に投んとす

あゝ郷等が

その肉彈は正に

暗黒を照らす

同胞の羅針盤

眞摯な魂の叫び  
研究の眞理と



言論の權力とは

事實に先づ實行だ

ひどく、強く

きつく、戦へ

主義ある人こそは、男の中の男だ

主義に倒る人こそは

青史の頁を永遠に飾る人だ

肉弾で暗雲を貫け

それは近頃はやる

『第二世教導』の

ムーブメントに比べて、はるかに高い

戦へよ、天晴れな

堂々たる男子の態度で。

# 新婦人の十字架

(郁子女史に捧ぐ)

謎の人

疑問の女性

その人は

時事問題の解剖者

鋭いメスの批判者

『日米時事』に燦と光る

それも、そうだわね

短い言葉の白刃と光る斷言

柔い細い美しい情緒の流れ



キビくした個性

犀利な眼光

一世への反逆

それは私に刺戟と反省と

考察と暗示とを授けた

おゝ非凡な才媛の想

職業記者でない

真剣な心の絶叫者

婦人解放の眞戦士

二千餘年の手垢の

因襲の絆と、傳統の殻を

すつさりとかなぐり捨て

家庭から街頭へ

研究室から戦線へ

象牙の塔をでい

純真な心のまゝに

嚴正批判の筆を揮へ

建設的努力を捧げ

人として女性の

人權を主張せよ

南加の婦人に

ソフィヤはゐない

自由と自治の訓練はない  
性的解放の叫びはない。



男性中心の専制制度の法則から

性的奴隷の生活から

婦人の魂をとり戻せ

それは新婦人の教導者が

新に負ふ十字架である。

佐藤 一水

世紀末の聲

夜の沈黙の底より



## 世紀末の聲

詩詠むは空想の子ぞ

われひとり

大地の上にいきみ立つ。

詩を知らず未だ生を知らず

豈に死を知らん

唯だ、戀を知るのみの吾れ！。

金が何んだ、財寶が何んだ

死んでしまへば

裸にして野に朽るのみの此身。

泣け、泣け女ようと泣け！  
涙乾きなば

お前は生きる資格なし。

貴女の風姿は眞に高潔です

その聲その涙も……遮莫

『あの聲でとかげ喰ふかや杜鵑』  
はととぎす

『貴女とならばどこまでも……』  
眞實の叫びです！

北國の空、既に雨期に入る。

凡そ見苦るしきもの

男の嫉妬、女の忿怒

『性の前には神は久遠くゑんに眼つよを瞑る』



あれー鐘が鳴りますよ、鐘が！  
不圖叫びしあの夜の寢亂髪、  
忘れ得ず日記讀むかも。

『主は死んでも墓へはやらぬ、  
よくつて？焼いて粉にしてね』  
女は到底夜叉の化身なり。

雨が降ります、風が吹きます  
わたしの胸に、

なぎるその日よ、あゝ寂滅爲樂。

不許わんしゅさんちにいるをゆるさず葦酒入山門、女人禁制、

とは不粹なものよ

酒なく、女無くて何んの人生ぞ。

## 夜の沈黙の底より

眼は瞑れど眠られぬ夜なり

『性』のなやみ

汝がおもかげを追ふ。

『もう遅いのに、お寝みなさい！』

小癪に障りし言葉なりき。

さわれもだして諾<sup>うべ</sup>へしかな。

霧の巷に泣き濡るゝ

アークライトの瞬きに似し

そなたの瞳幾夜抱きし。



更た闌たけてすべては眠る――

君と秘密の舞踏、汗の滴り、

淫よらなる夜に吾れもありしかな。

かたみかはせし手枕の

かひなの疲れ

未だ癒いやらぬを君に背かる。

お前はよく花を呉れたね

よく泣ないても見せた。

そは男た蕩ちしの術じゆつ！汝は夜叉だ。

『貴郎の被仰たることは――

どれも、これも、みんな皮肉よ』

然りお前には熱血は禁物也。

眉目美きは汝が誇ならば  
予は力もて汝に臨まむ。

『柔克制剛』は遂に夢想たらん。

戀に破れ

戀を覺るはあまりに傷まし

初戀にして死なば嬉しからまし

初戀にして

そのまゝ死なばうれしかり

相抱き死なば猶ほうれしかり

今眠る〓其瞬間を知らぬ我、

死もまたかくや……？

さあらば、うれし。



塚本嶺南

懐しき蓬の葉よ

廢れゆくミツシヨンの土塀

## 懐しき蓬の葉よ

お、懐しき蓬の葉よ！

私はどんなにお前が懐しいか、

よくもお前は萌出てくれた。

お前を見出したとき、

私はどう思つたか？

私を認めたお前は、どう思つたか？

冬枯れの氷で閉ぢこめられた

その内にあつて……よくも

お前は凍え死なずに居てくれた。

お前は斯うして來る年も亦くる年も、



萌え出て來たと言ふであらう。

私はさうしたお前の先祖がなつかしい。

地中に隠れて居る其の間も、

お前は時季を忘れない。

私どもが呟く此のアラスカの小雨は、  
お前への時季の報せであるのだ。

青々と萌出るお前の其の香りは、

貴い——聖い新春の日の誇りである。  
私はどうして之が忘れられようか？

蓬の團子や蓬の餅を好いた、  
私の幼き日の誇りが懐しい。

小刀を片手に笹かごを提げて、  
隣りのSちゃんやCちゃんと遊んだ春の野  
あゝ幼き日の誇りが懐しい。

北のはてなる極光オロラのもとで、

氷の山を背景とした異國の荒野で、

お前に出合ふとは私は思つて居なかつた。

どれだけの人がお前を見つけ出して、

お前の其の懐しい匂ひを。

嗅ぎつけるであらうか？

而して昔を思ひ偲ぶであらうか？

旅から旅へ………



渡り行く漂浪の此の私の夢の華を、

お前は嗅ぎつけるか？

お前のお隣りの杉菜や落を、

私はまだどうして忘れて居ようか。

どうぞお前の其の胸に、

私の此の思ひを、

お前なりとも納めておくれ。

青々とした新春の色、

刺げくした、

でも優しみのある、

大自然の貴い聖らかなお前の其の姿を

今も私は思ふ。

(著書 極光をたづねて)

## 廢れゆくミツシヨンの土塀

青々としたバームの葉蔭

屋根朽ち落ちし土塀のアーチへ

笈を負つた獨りの巡禮者はイミ

無言の彼は慄くやうに土塀にふれる

昔の世界の華やかな夢

彼の眼には涙がぼとり

いたしき魂からながる。

日輪がバームの葉蔭から逃れ

セイジブラシの叢にかくるゝとき

笈を負つた巡禮者はひとり



破れた土塀をあとに靜かに歩みはじむ。

廢れた寺の鐘樓から

今宵も亦思ひ出したやうに

ゆるやかな鐘の音が微かにゆるぐ

暮れゆく日の鐘の響き。

昔の世界の夢の華のまばろし

土塀の鐘樓が朽ち落ちて

大地に瞑る其の日まで

南カリホルニアの低地から……深山へ

今も谿流に生きゆく

無心の赤色の童顔を慰む。

山崎一心

旅立つ日

放浪者の詩



## 旅立つ日

旅立つ時が参りました  
お支度は準備しましたか  
處女の神祕を語る  
聖母マリアの像か  
錯亂した意識で  
私は灯も微なる室を

幾度も見廻しました。  
異國の空は更けて  
閑然<sup>ひっそり</sup>とした私の寢床に  
十字架に血を流した

イエスの像が懸つて居るではありませんか  
イエス基督の像が！

憑れた人のごと私は叫びましたら  
限らない淋しさと悔悟で私の心は充みました

お支度は出来ましたか

別個の世界が

私の心にうつるではありませんか

―イエス様たすけて下さいませ―

現實の世界で

見せつけられた奇蹟に

嘗ての生命への讃歌と

無の世界への憧憬は



死の國に伸ぶ苦痛の芽

しま

一個の靈が死せし人の形骸から甦る

踏みしめた地は

涯てしもない沙漠だが

光明の彼方から吹き寄す

生命の風の快よさ。

## 放浪者の詩

―メキシカン公園の印象―

喧騒と雑音の中心地

其處には無數の勞働者が

長い髪を撫でもせず

古いベンチに腰を卸して居る

此處は南加の都

歡樂の夢まだ醒めぬのに

時は春だと見えて

嘗て霜枯だつた樹木は

一齊に伸びようとして、

世界への躍動を備へて居る、



だのに

起つ可き筈の労働者は

未だに醒めない。

理想と生命意慾を擲つた

弱い人間の集合

凡ての生存權を放擲した

魂の死んだ形骸の中で、

お前達は何をすると云ふのだ

社會組織を否定する君達は

根底のない虚無主義から

何を擲むといふのか

見給へ、

彼方に突進する君等の兄弟を

産業生産の犠牲となつて

尊い肉體を

機械にかけて削つて居るではないか

汗と血と――涙の中で

君等の兄弟は闘ひ續けて居るではないか

過度の勞働の唸の中から

創道への努力を忘れない

後等の眞劔さはどうだ

無産者！

時代の鐘が亂打されて



來る可き時を報じて居る

お前達の精神躍動を掴み出すときを

夢病者のような

俺等の肉體を

大地の底から湧き出る冷水で潔めようではないか。

世界幾億の無産者が

赤銅色の肉體を裸にして

男子らしく叫ぶのだ

其處に――

傳統と因襲が破壊されて

人類相愛の種が心の畑に播かれるのだ

勞働者よ起たうではないか。

## 卷 末 に

生まれ出づ可きものは産まれなければならない。アメリカに放浪する詩人廿五名の作品が一冊の詩集と成つて移民地に遣る。たとへ我等が屍が異國の地に萌え出づる雑草の糧となり果てようとも、我等が肉碑は地上にあつて彼等に遣る。

過去一ケ年間の私の努力も無意義ではなかつた。いま私は各自が臨終までも藝術を語りつゝ逝くてあらう同人のひとりびとりに感謝の涙もて此の言葉をおくと共に、移民地と謂ふ特殊環境を背景とし、同じ運命を背負つて雄々しく生きて行かれつゝ在る諸兄弟が愛の懷にこの嬰兒を抱き育まれ人事を切望して止まぬ者である。(山崎一心)



大正十四年十一月七日印刷

【定價金貳圓】

大正十四年十一月十日發行

米國加州羅府東二街三百二十五番

編輯者 山崎一心

325 E. 2nd St., Los Angeles, Calif.

◁ 放浪之詩 ▷

發行所 放浪之詩社

印刷所 南加印刷所

218 So. San Pedro St.,  
Los Angeles, Calif.

